



Title	インターカルチュラリズムの理論：多様な人々の間を 推移的ネットワークで架橋する
Author(s)	河村, 倫哉
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/98687
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (河 村 倫 哉)	
論文題名	インターカルチュラリズムの理論：多様な人々の間を推移的ネットワークで架橋する
論文内容の要旨	
<p>今日でも世界で数多くのエスニック紛争が生じていることを考えるならば、異なる文化を持った人々が共存のために準拠すべき規範原理を明らかにし、それを実現するための方法を提示するというのは、現代の喫緊の課題である。この点について、これまで大きく分けて自由主義と多文化主義という考え方があったが、自由主義は個人に、多文化主義は集団に注目するあまり、有効な対策を示せないでいた。それに対して近年では、個人でも集団でもなく、集団間を横断する人々の交流に着目して共存を促進しようというインターカルチュラリズムの立場が現れてきた。この考え方は妥当であるものの、まだ十分に理論的基礎が固まっていない。そのために、自由主義と根本的な考え方は変わらない、あるいは実際に推奨される政策は多文化主義と変わらない、などの批判を受けている。そこでインターカルチュラリズムに独自の理論的基礎を与え、より妥当な共存原理とその実現方法を提示しようというのが本稿の目的である。そのために以下の三点を明らかにする。</p> <p>第一に、共存のための規範原理として、形式的なものにとどまらない、実質的な機会の平等が考えられるべきである。例えば単に平等な公教育制度を実現しても、スラムに生まれた子供たちは教育を受けることのメリットも知らされず、周囲の大人から学習に対する理解や協力も得られない。つまり、子供たちは情報や協力などの社会資本に欠けているために、実質的に平等な機会を享受できていない。どのような人々でも必要な社会資本を得られ、実質的機会を平等に享受できるようにすることが、異なる文化の共存にとって最も重要だと考えられる。</p> <p>第二に、必要な社会資本を生み出すために、推移的ネットワークが構築されなければならない。これはマイノリティ保守派—マイノリティ穏健派—マイノリティ進取派—マジョリティ進取派—マジョリティ穏健派—マジョリティ保守派というように、少しずつ異なった人々が順々につながっていくネットワークである。このようなつながりならば誰もが無理なく参加できる。それを社会の隅々にまで広げていくことによって、あらゆる人に必要な情報や協力などの社会資本が得られるようにし、実質的機会の平等を享受できるようにする必要がある。</p> <p>第三に、推移的ネットワークの架橋が難しい場合には、立場的利益の再編という方法が重要になる。多くの人々は一方で変化する環境に柔軟に対処したいと思ひ、他方で昔ながらの文化を維持しアイデンティティの安定を得たいと思っている。ただし、そのバランスが人によって異なるため、進取派、穏健派、保守派などの違いが生まれる。人は自分と異なるバランスを重視する人に反発を覚えるかもしれないが、自分よりも進取的な人と交流して外の状況を知り、自分よりも保守的な人と交流して文化の価値を再確認するのは利益にもなる。こうして自身の立場に由来する利益を強調することによって確実に架橋を進めていく必要がある。</p> <p>以上の三点を明らかにしたインターカルチュラリズムの理論は様々な点で効果を発揮できる。そもそも、エスニック対立の発端自体が社会資本をめぐる競争によるものだとすることを明らかにできる（第一章）。そして文化に関わる既存の規範理論よりも無理なくあらゆる人々の境遇を改善できる（第二章）。推移的ネットワークで人々の交流を促進し、人々が手にする社会資本を増やせば、内部で抑圧的な習慣を維持している文化集団にも無理のない自由化を促すことができ（第五章）、公教育制度（第六章）や言語制度（第七章）など、特定の歴史、文化、言語を基準として採用せざるを得ないものについても、偏りの少ない制度化を促すことができる。以上のような形で、本稿はインターカルチュラリズムに理論的基礎を与え、異なる文化を持つ人々の共存に確かな責任を担えるような理論を提示しようとした。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (河 村 倫 哉)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教授 大久保 邦彦
	副 査	教授 福井 康太
	副 査	教授 (法学研究科) 乙部 延剛

論文審査の結果の要旨

本論文は、エスニック紛争が世界各地で頻発する現状に鑑み、エスニック集団間を横断する人々の交流に着目して共存を促進する「インターカルチュラリズム」に独自の理論的基礎を与え、「リベラリズム (統合主義)」やマイノリティ集団に積極的な支援を与える「多文化主義」よりも妥当な共存原理 (異なる文化を持った人々が共存のために準拠すべき規範原理) と共存の実現方法を提示することを目的とする。

本論文は、序章と終章を含め9つの章から構成される。序章では、問題の所在と本論文の構成が示される。

第一章～第四章は、異なる文化の共存をめぐる問題についてインターカルチュラリズムが採るべき一般的指針を論じる理論篇であり、第五章～第七章は、共存に関わる難問を取り上げ、インターカルチュラリズムの基本構想が有効な解決策となることを示す応用篇である。

第一章では、エスニック紛争の根幹に社会資本の不均衡があることを解明する。

第二章では、多元的秩序を補う新たな規範原理の可能性を検討し、異なる文化を持った人々を共存させるには、実質的機会の平等という一般的原理が必要であり、そのためには人々に社会資本が十分に行き渡る必要があり、それを可能にするものとして推移的ネットワークが有望であることを示す。

第三章では、推移的ネットワークが共存の実現にとって望ましい性質を備えていること——人々の特殊性が積極的に活用されてつながりができるために、他のつながりよりも人々を包摂的かつ公正に扱うことができ、十分に社会資本を提供することができること——を明らかにする。そして、「推移的ネットワーク→社会資本の平等→実質的機会の平等→異なる文化の共存」というインターカルチュラリズムの基本構想が示される。

第四章では、推移的ネットワークの構築方法を明らかにする。文化集団の中でも人々の立場は集団の内的統合機能と外的適応機能をどれだけ重視するかによって異なっている。いずれの人にも近くの他者と交流することに固有の利益や反発がある。各人の立場に合わせたつながりを作るためには、まず直接交流する相手と共有できる重要な利益を見つけてつながりの橋頭堡をつくり、そこで反発が生じてそれが橋頭堡の確実化にうまく活用できるような作り方を考えるべきである。

第五章～第七章は応用篇であるが、共存に関わる難問として、非リベラル (人権侵害的) な慣習を持った文化集団の扱い (第五章)、公的制度の (公教育 [第六章] ・言語制度 [第七章]) の文化的中立性の問題が検討される。

終章では、本論文のまとめが行なわれる。

本論文は、先行研究を十分に渉猟・検討し、ロールズ的なリベラリズムを追求すべき価値として指定した上で、インターカルチュラリズムの規範原理とその実現方法を論理的かつ明快な議論に基づいて示した点において、新規性が認められ、高い評価を与えることができる。

ただし、その構想は理想主義的であり、推移的ネットワークによって実際に有益な社会資本が生み出され、実質的機会の平等が実現されるのか、他者とのつながりを持ちたくない人々 (例、アーミッシュ) に対する配慮に欠けるのではないかと、等々の疑問があるほか、個人 (特にマジョリティ) と政府の役割分担に不明確な点が残る。

とはいえ、本論文は、特にエスニック集団共存の実現方法について、独創的かつ壮大な社会理論を提示するものであり、審査委員会は一致して本論文が博士 (国際公共政策) の学位を授与するに値すると認定した。